

第64回

上高井教育研究集会研究概要

平成29年度



上 高 井 教 育 会

上 高 井 校 長 教 頭 組 合

県 教 職 員 組 合 上 高 井 支 部

—— 目 次 ——

まえがき	1
大会スナップ	2
1 子どもの適応と人間関係づくり	4
2 子どもの生活づくり	5
3 キャリア教育と進路指導	6
4 人権同和教育	7
5 健康教育	8
6 子どもと地域社会	9
7 子どもとスポーツ・遊び	10
8 教育条件の整備	11
9 情報教育	12
10 国際理解・コミュニケーション活動	13
11 特別支援教育	14
12 表現力・感性、思考力の育成	15
13 子どもと本	16
あとがき	17

ま え が き

上高井教育会・上高井校長教頭組合・長野県教職員組合上高井支部の三者共催による「第64回上高井教育研究集会」を、去る9月2日に相森中学校を会場として開催しましたところ、600名余の皆様方のご参加をいただき、盛会のうちに終了することができました。

ご多用の中、村石・堀内県議会議員様、上高井三市町村の教育委員長・教育長様をはじめ、上高井の教育を支えていただいているご来賓の皆様方のご臨席を賜りましたことに深く感謝を申し上げます。

また、地域の皆様、PTAの皆様、教育関係者の皆様には、早朝よりご参集をいただきありがとうございます。さらに、助言者の皆様にはご多用にもかかわらず快くお引き受けいただき、具体的で分かりやすいご助言・ご指導を賜り実りある研究集会となりました。誠にありがとうございました。

近年、少子高齢化や国際化、高度情報化、子どもの貧困の問題など、子どもたちを取り巻く家庭・社会環境が大きく変わってきています。人と人との結びつきが希薄化し、子どもたちの学ぶ意欲や学力・体力の低下、ゲームや携帯電話・スマートフォンなど、インターネットに絡む問題や依存の問題、教育力や教育環境の低下など、多くの面での課題が指摘されています。こうした課題について、上高井の子どもたちにおいても例外ではないと思います。

一方、本年度は、念願でありました須坂支援学校の中学部の生徒さんの進学先としての長野養護学校高等部分教室が須坂商業高校の敷地内に開室され二年目を迎えることができました。また、「須坂創成高校」が開校三年目を迎え、平成30年度の商業棟完成、キャンパスの統合に向けて着実にその歩を進めています。このように、地域の皆様のご支援・ご協力により、子どもたちを取り巻く教育環境が整備されてきています。

こうした社会環境で生活する子どもたちの教育問題を考えるとき、学校・家庭・地域が個別の問題として捉えるのではなく、連携を強化し、社会全体の教育問題として、一緒になって考え支え合うことが益々大事だと思います。

本研究集会におきましては、日頃の教育実践を持ち寄り、成果と課題、悩みなどを、教職員とPTAの皆様方と子どもたちの教育に携わっている方々と一緒に語り合うことを通して、子ども理解を深めたり、教育支援の和を広げたりして、私たち自身の資質向上を図るとともに、「地域の子どもは地域で育てる」という地域教育の振興に寄与することができたと思います。関係者が連携して取り組めるために、教科別テーマではなく今日的課題であるテーマ別分科会を設定しておりますのも、本研究集会の特質です。地域の課題を明らかにし、解決に向けて共に学び合い、そして協働で課題解決に取り組むことができる上高井になることが、子どもと大人の幸せの実現につながると信じています。

最後になりましたが、教育研究集会の開催に向けましてご尽力いただいた澁谷茂夫研究推進委員長をはじめ推進委員の皆様、各校において推進していただいた学校代表者の皆様、分科会を運営していただいた分科会長・司会者・記録者の皆様、貴重な実践レポートを発表していただいた皆様、会場を提供し準備していただいた島田浩幸校長先生をはじめ、相森中学校の先生方、生徒の皆さんに深く感謝申し上げます。皆様のおかげで充実した教育研究集会になりました。ほんとうにありがとうございました。

上高井教育研究集会委員長 児玉明代

平成29年度 教研集会スナップ



各分科会において、助言者の先生方には丁寧な、温かいご指導をいただきました。

本年度も、例年どおり、相森中学校を会場に教研集会が開催されました。

会場校の先生方には、会場準備等さまざまな面でご協力をいただきました。感謝申し上げます。



また、分科会長、司会者、記録者の皆様には分科会が滞りなく運営できるよう、ご尽力いただきました。



本年度も、教職員、PTA、地域の皆様をはじめ、大勢の方々にご参加いただき、ともに学び合う機会となりました。参加していただいた皆様、ありがとうございました。



分科会にご自身の実践等を発表していただいた皆様、お忙しい中準備をしてくださりありがとうございました。



ハッピーレターのやり方

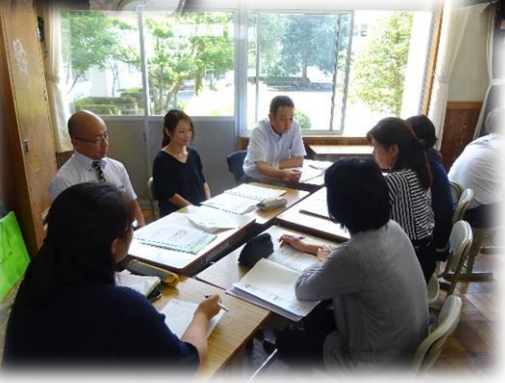
①名刺大のカード1枚に1人の名前を記入する

係の子どもにカード左上にゴム印をおす分限を任せている。



今年に向けて

- ・児童の発達を促すための活動の充実を図る
- ・児童の学習意欲を高め、主体的な学習活動に取り組ませる
- ・児童の学習成果を評価し、学習意欲を高める
- ・児童の学習成果を評価し、学習意欲を高める



最後に、教研集会開催にかかわり、協力してくださったたくさんの方々へ心より御礼申し上げます。
ありがとうございました。

第1分科会 子どもの適応と人間関係づくり

一 研究テーマ

みんなが明るく学校生活をおくるための人間関係づくり

二 研究成果

1 レポート発表

(1) 「自己肯定感向上を目的としたモジュール学習の実践について

～「できた!」「わかった!」体験を積み上げるモジュール学習～ 高甫小学校 松倉 邦幸先生

・モジュール学習についての説明 目指すものや考え方と流れ・ポイント

・常に「できた!」「わかった!」という成功体験を積み重ねることによって自己肯定感を高めることができる。

(2) 「ハッピーレターを生かした人間関係づくり」

栗ガ丘小学校 藤澤 美貴先生

・ハッピーレターを取り入れたきっかけとそのやり方についての説明

・回数を重ねる毎に変容していった女の子のコメントを通して見えてきたこと

2 学んだこと

(1) ・モジュール学習を通して、物事を学ぶ核である「やる気」「意欲」をつけ、粘り強く諦めない気持ちや困難に立ち向かおうとする力を育てることができる。

・昨日の自分より今日の自分の伸びを大切にし、繰り返すこととチャレンジする気持ちを大切にする。苦手でもよいことを伝え、できたことを認めてやっていく。

(2) ・教師が知らないことを子どもたちが知っていて、それを子どもたちが教えてくれている。書画カメラで紹介したり、手渡ししたりするのもよい。

・肯定的に見てもらって嫌な人はいないので、対人関係のいい関係が持てる。先生や親が加わるとさらに効果が期待できる。

3 助言者の指導

CAPながの 吉池 優子さん 上野久美子さん 吉原 啓子さん

(1) CAPとは Child Assault Prevention (子どもへの暴力防止)

(2) 暴力とは「人の心と体を傷つけること」であり、暴力を受けることは自分の「安心」「自信」「自由」の権利を奪われる人権侵害であるということ。人権意識＝「安心」「自信」「自由」の権利をもっている私

(3) 5年生に行うワークショップを全員で体験する。

(講師の方が寸劇を実施) 内容：友だちにお金を持ってくるように強要される。

友だちがいて、困っている友だちを助けてくれると3つの権利が戻ってくる。

(4) 「大切にされているという経験」とどんな小さなことでも「自分で選ぶ」ことが自由につながる。自由は決して好き勝手ではなく、失敗したら選び直していく。

(5) エンパワメント＝子どもたちが本来持っている力を信じ、引き出すこと。「子ども自身に乗り越える困難を乗り越える力がある。」心の弾力性があると自分を大切に思う気持ちを持つことができる。

(6) G I F Tの体験 「自分の言ってもらいたいこと」を言ってもらおう。「聴くこと」が大切

三 残された課題

CAPながの 吉池 優子さん 上野久美子さん 吉原 啓子さん

相手に信じてもらうには、まず信じてやるのが大切。話を聴くことは心に聴くことと同じ。

大人に余裕が無い時には話を聴いてあげられない。子どもは大人の姿をよく見ているので、気をつける。

第2分科会 子どもの生活づくり

一 研究テーマ

家庭と学校・園で協力して考える、子どもの生活習慣

二 研究成果

1 グループディスカッション ～ ②グループより ～

保護者に子どもたちの生活を振り返って気になることを発表してもらうと、食事中におしゃべりをしている食べる時間が長いこと、宿題をやらなくて困っているが本人にやる気がなく焦らないこと、子どもの叱り方、男女の子育ての違い、タブレットの使用時間や環境、平日の習い事で忙しいことなどが出された。特にゲームやスマホの扱い方やSNSでのトラブルについて話題になった。保護者が子どもの頃は携帯電話がなく家の電話を使って連絡を取っていた。「電話は21時までにする」「長電話はしないこと」など相手の家族に迷惑にならないように配慮していた。しかし、現在は携帯電話が普及して大人も子どもも自分の空いた時間にメールや電話が自由に使用できる環境にある。生活は便利になったが日本本来の大切な文化が失われつつあるのも確かである。また、LINEなどでのトラブルの原因は、コミュニケーション能力の低下が大きく関わっている。食事中に同じテーブルに座っていてもそれぞれの携帯やゲームをしている家族、公園に集まって輪になって座り会話をしないでゲームをしている子どもの姿を目にする。子どもたちを取り巻く生活環境に人と会話をすることが減ってきていることがコミュニケーション能力の低下に繋がっているのではないかと。また、コミュニケーションを取らなくても生活できる世の中になってきている。また、最近はYouTubeを見る子どもたちが多い。検索次第で何でも見られるため、年齢制限が必要な動画でも見ることができる。

これらのことから、これからの時代を生きていかなければならない子どもたちにとって何が大切かを話し合った。SNSは必ず必要になってくる。だからこそ、子どもたちには「自分で判断する力」「良い事が悪い事が分かる力」「自分で考えられる力」をつけることが大切ではないかと。

2 助言者の指導

「乳幼児の生活づくり」

社会福祉法人 稲田会 理事会 かさぐるま保育園理事長 五十嵐文子先生

乳幼児の生活リズムのモデルは、大人である。保育園や学校では決まった日課によって活動しており、日中の活動でたくさん体を動かすと、お腹が空き、よく食べ、夜は眠くなるリズムが作られる。各年齢に沿った生活や遊びを通して、喜び・思いやり・優しさ・賢さ・怒り・悲しみ・折り合いを付けるなど生きる基本、社会性を自分のものにしていく。0～1歳ごろまでは、大人に遊んでもらうことで仕草や目線から愛されることを学び、触ったり触られたりする感覚から「心地よさ」を感じる。心地よいと感じれば心が育ち笑顔が生まれる。2～3歳になると言葉も発達するため、大人との関係の中でも言葉の共有ができるようになる。友達と実体験に沿ったごっこ遊びができるようになり、遊びの中から自分の気持ちを伝え、友達の気持ちも受け止められるようになる。4～5歳になるとルールのある遊びや技のある遊びが増え遊びの名人が生まれる。名人に憧れて技にチャレンジしたり、粘り強く取り組んだり繰り返したりしてことで「いつか頑張れば出来るようになる」「続けているとできるようになる」といった自分に対する信頼感を養うことができる。5歳ごろまでのそだちが9～10歳ごろの育ちの土台となるため、集団遊びを充実させ社会性を育て、様々な経験を通して自分で自分を励ます力を養っていく。

最後に、保育園で育てることは、一人ひとりの子どもの思いを受け止め、励ますのは人間としての温かさであり、生きる姿勢である。そうした人間らしいつながりは、日頃の何気ない生活や遊びと関わりの中で育つものである。息がかかるくらいの距離で寝食や遊びやトラブルをともにする中で仲間への共感や思いやりが育っていく。それが、保育の基本ではないかと思う。

第3分科会 キャリア教育と進路指導

一 研究テーマ

夢と希望をもって自分の進路を切り開いていけるキャリア教育・進路指導のあり方

二 研究成果

1 レポート発表の概要

(1) 「総合的な学習の時間を使ってキャリア教育を進める『12才の決意』」 栗ガ丘小学校 牧 志帆先生
・小学校卒業後からの自分の進路について考えた（したいこと、なりたい自分、今の夢等）。

- ・月に1回程度、講師を呼び様々な職業の方から話を聞き、その職業に触れた。
- ・インターネットを使って職業について調べ、外国語のスピーチと関連させ、最後の授業参観日に発表した。

(2) 「ワインぶどうの収穫体験(4年)」「二分の一成人式の活動(4年)」「夢の教室の取り組み(5年生)」
高山小学校 加藤 敦子先生

- ・夢教室の講師には、元フットサル選手の小宮山友祐さんを招いて、夢をもつことの大切さや人生の分岐点に立った時、自分の進むべき道を選び取っていくことなどを具体的に伺うことができた。

(3) 「6年生の職場体験学習のながれ」 須坂小学校 金井 直樹先生

- ・1つの職場にできるだけ一人で行き、人と積極的にかかわる中で協力することを学んでいる。

(4) 「職場体験学習に第1次産業（地域の農業・林業）を取り入れ、1泊2日で実施」
常盤中学校 木野瀬 正典先生

- ・初めての試みで、まだまだ情報不足だったり計画不足だったりしたが、今後は、班ごとに分宿するなどして、更に人とのつながりを大切にしたい農業体験を取り入れていきたいと考えている。

(5) 「少人数グループで先輩から話を聞く会を実施」 相森中学校 島田 浩幸先生

- ・人数を減らしたことで、先輩を身近に感じ、例年よりも高校について関心を持ち学習意欲も増している。人は心が動いたときに変わることができるので、人とのつながりを大事にさせたい。夢があることが大事。

(6) 「14歳の就活をテーマに、実際の就職活動のように取り組む職場体験学習の実施」
墨坂中学校 根岸 珠美先生

- ・マナー講座ではジョブカフェの方に来ていただいた。職場との電話の対応は、緊張して良い体験になった。

2 学んだこと

(1) キャリア教育とは総合学科と結びついている。特別なものではなく、「ありがとう」「助かった」「ご苦労さま」等々、普段の生活の中にある。「みんなと協力して仕事ができる」挨拶やお礼が大事である。キャリア教育は、学校だけでなく、家庭でも取り組めること。経済と教育は、結ばれている。

(2) 職場体験学習をこんなにも実施していることはすごいことだが、それだけ（その仕事につかせることだけ）が、キャリア教育ではない。キャリア教育は1つの形ではない。教職員の熱意が大事である。

3 助言者の指導 中野立志館高等学校 校長 田村 浩啓 先生

- ・高校とやっていることはあまり変わらないので、もっと義務教育との関係を知り高校がやっていることを知らせていきたい。高校選びでは、「その高校を出てどうするか？その高校に行ってどうするか？」等の目的がないとダメである。

- ・コミュニケーションでは、挨拶も大事だが、「将来、どんな仕事に就きたいか？」という問いかけは常に子どもにしてほしい。

- ・アウトプットができる支援が必要。日本人は苦手である。自己肯定感を育てたい。

三 残された課題

- ・時間の確保を必要とするのではなく、形にこだわらず、普段の生活の中で子どもたちに活動させられることを考えること。

- ・校内ですべての視点の確認をしたい。

第4分科会 人権同和教育

一 研究テーマ

人権を尊重し、人権問題を解決しようとする児童・生徒を育てるための指導のあり方

二 研究成果

1 レポート発表の概要

(1) 各校の実践発表

小学校		中学校	
・栗ガ丘小学校	長田 みゆき先生	・小布施中学校	赤羽 美和子先生
・小山小学校	佃 啓光 先生	・常盤中学校	小林 秀行 先生
・森上小学校	割田 正樹 先生	・相森中学校	大槻 拡子 先生
・日野小学校	久保田 雅 先生		

2 学んだこと

各校の実践から互いに学ぶ良い機会になった。小学校の実践においては、どの学校の実践でも「言葉」について考えられていた。栗ガ丘小の実践では資料を通して、隠された気持ちについて考えることも必要だということを知った。また小山小の発表からは、大人だって認めて声をかけられれば嬉しい気持ちになる。子どもなら尚更だ。お互いを認め合うとともに、互いに関わりあうことが「人権学習」の大切なポイントではないかということを知り、日野小の実践から考えることができた。

小学校では同和問題について高学年で扱っている。被差別部落の方が受けた差別について、小さいうちから学ぶことで「差別はいけない」という感覚を植えつけていくことが大事であると感じた。

中学校の実践では、小学校よりも同和問題についてさらに踏み込んだ内容を扱っていく。知識として知っていることも大事だが、社会の中で実践できる態度を養っていく必要性を感じた。いまだに差別は根強く残っている現状がある。差別を他人事ではなく、自分のこととしてとらえることができるような指導の必要性を小布施中の実践から感じた。また同件事象でも人によって受け取り方が違う。互いの考え方も違うということを知っておく大切さを相森中の実践から感じた。

さらに中学校では「新しい人権」についても扱っていく必要性を感じた。常盤中の実践ではSNSのトラブルについて扱っていた。SNS上でのトラブルが新たな問題として浮上してきている以上、人権教育もメディア教育と関わりあいながら、指導していく必要性を感じた。教師もSNSなどのメディアに積極的に関わっていくことが大切だと学んだ。

3 助言者の指導

差別について正しい知識を身につけさせることの大切さを各校の実践から感じた。視聴したDVDからは障がいをもった方への差別について考えさせられた。

昨年12月16日に公布・施行された「部落差別の解消の推進に関する法律」では初めて国が「部落差別」が現在も続いていると認めた法律である。この法律の中では国と地方公共団体が差別を解消するためにどうすべきか書かれている。教師も改めてこの法律について考えていくべきだという指導をいただいた。

三 残された課題

- ・人権教育を指導する我々教職員が正しい知識をもち、差別についてダメなものダメとはっきりと伝えていく。人権問題について個人差なく、どう扱っていけばいいかということが課題として残った。

第5分科会 健康教育

一 研究テーマ

「健やかな生活を支える食習慣のあり方」 ～子どもが育つ食のチカラ～

二 研究成果

1 ワークショップ

須坂市学校給食センター 栄養教諭 高橋 和子先生

(1) 「脂質量を目で見てみよう」

市内5年生の食育授業で行っている‘血液に脂（牛脂）を入れて固まる状態の実験’を行った。さらに、ポテトチップス、アイス、チョコレート、ジャムマーガリンパンの中に含まれる脂質量はそれぞれ給食一食分の脂質と同じ量であることを観察することを通して、これが蓄積されるとどうなるか考えることができた。しかし、同時に脂質は3大栄養素としてとても大切であり、効率よいエネルギー源となるため、1つの栄養素を抜くダイエットは大変危険である。脂質は燃料として貯蔵されていくことが問題なので、脂質の取り過ぎは見直したい。また、魚、人間、動物の体温の比較から、動物の脂は人間の体の中で冷えて固まりやすく、魚の脂は人間の体の中でサラサラになることを知ることで、脂質の偏りが問題となることを考えることができた。

(2) 「子どもが育つ食のチカラ ～よりよい朝ごはんのために～」

「食育」と「給食管理」を一体のものとして行い、教育上の高い効果をもたらすための専門職であり、給食を食べた子どもたちがこの先どう育っていくかを考えていくのが栄養教諭。食育基本法（H17.7施行）を基とした、学習指導要領の「学校における食育の推進」（H20.3告示）、学校給食法（H21.4施行）より、食育推進基本計画の目標達成に向けて、子どもたちへの食育を学校教育活動全体として取り組む必要がある。

また、「よりよい朝ごはんのために」「何をしたらよいか」参加者のグループごとでブレインストーミングを行い、発表し合った。

2 学んだこと

(1) 血液の中に入った油が固まる様子や、身近な食べものに含まれる脂質量を実際に目で観察することで、脂質の取り過ぎや偏りが体に与える影響、生活習慣病予防への意識を高めることができた。

(2) 食育基本法を基とした子どもたちへの食育の背景には、朝食抜きや生活習慣病の若年化、生活リズムの乱れ、やせ願望、肥満傾向など、子どもたちの食の乱れがあることがわかった。ブレインストーミングでは、皆が同じ悩みをもち、子どものためにがんばっていることがわかった。

3 助言者の指導

学校給食も家庭での食事も、日々チャンスのかたまり。食の大切さをあきらめずに伝えたい。スポーツしている人は、好き嫌いをなくすことと、眠ることができることが勝つためにも大切になる。大事なものは、「何を食べるか」より、「何のために食べるか」を考えること。そして「あなたは、あなたの食べたものでできている」を意識すること。風車理論（ライフマネージメント風車理論 小澤・西嶋）のどこかに風をあてて風車を回し、健康の柱である運動・食事・休養のバランスを大切にしてほしい。

三 残された課題

「食育は、いつか実のなるその日のために」を心にいつも留めながら給食を通して食育をしてくださる栄養教諭の話は、参加者の心を揺さぶる分科会となった。食の世界は本当に幅広く、食育の背景は刻々と変わっていくが、食育の基本線は変わらないというお話から、日々継続することの大切さをあらためて感じた。食育の取り組みが、子どもを育て、さらに命の教育、命を大切にする力につなげるために、学校や家庭、地域がどのように連携して伝えていくかが今後も課題となる。

第6分科会 子どもと地域社会

I 研究テーマ

学校と地域の連携のあり方

II 研究成果

1 レポート発表の概要

(1) 「子どもの安全を守るとりくみについて」～「子ども見守り隊」の活動, 「さまざまな集会以での報告」から～

仁礼小学校 関 和之先生

仁礼小PTA活動の一つである「子ども見守り隊」の活動やこれまでの研究集会等から学べること。

- ・保護者が直接指導することで実態把握ができる。パトロール方法に柔軟性を持たせ活動しやすくする。地道な活動を継続していくことが大切である。
- ・「見守ること」「あいさつすること」の重要性。子どもの安全意識は、大人の安全意識次第である。

(2) 「あいさつの力」～みんなで考えよう 子どもの生きる力を育む地域社会～

県教組上高井支部執行部 H29 年度書記長 高山中学校 北澤 佳一先生

地域みんなで子どもたちのことを考え合う「第40回ゆきとどいた教育をすすめる保護者・地域住民・教職員のつどい」の取り組みについての報告として、「あいさつ」について、須高地区の小中学校児童生徒・保護者を対象に実施したアンケートの集計結果とその結果を受けてつどいで出された意見のまとめ。

2 学んだこと

- (1) 多様な地域・家庭の状況を加味し、関係者の協議に基づいて持続可能な仕組みを構築すること。
- (2) 各種調査やアンケートを生かして活動の目的を明確にし、共通の願いをもって学校・家庭・地域が連携していくこと。

3 助言者の指導

助言者：北信教育事務所生涯学習課指導主事 西澤 慎治先生

- ・子どもたちと地域住民のつながりづくりについては、「子どもたちとボランティアとの顔合わせ」や「学校の廊下に顔写真を掲示することで紹介する」などの方法を実施している学校がある。
- ・親子、地域住民と一緒に学ぶ交通安全教室の実施が大切なのではないかな。
- ・「子どもが関わるすべての環境で取り組んでいく」→信州型コミュニティスクールがその受け皿になるか。
- ・「あいさつ運動」など、学校ができること、地域ができることを共に取り組むことでつながりができる。

○信州型コミュニティスクールについて

- ・学校と地域が「こんな子どもを育てたい」という願いを共有しながら、一体となって子どもを育てる持続可能な仕組みをもった地域と共にある学校。
- ・運営委員会を充実させ、持続可能な取り組みに向けて子どもの育ちを共有化することを大切にしたい。

III 残された課題

- ・レポート発表にあったような小学校PTAでの「見守り隊」のような取り組みを、中学校でどのように取り組んでいけるか。(学校単位でなく、小学校単位や地区単位で地域との関係を深めていくのがよいか。)
- ・地域の一員として子どもにあいさつをすることは大切だと思うが、知らない子どもにあいさつすると不審者に思われる可能性もあって難しい社会になっている。あいさつができる地域社会をつくるために、私たち大人ができることは何か考えていくことが必要である。

第7分科会 子どもとスポーツ・遊び

一 研究テーマ

子ども（児童・生徒）の運動習慣の形成と健全育成

二 研究成果

1 レポート発表

(1) 「低学年が様々な運動を楽しく体験できる授業のあり方」 日滝小学校 田村 淳樹先生

子どもが興味あるものをもとに生活をしたいと考え、忍者になりきって活動する体育学習を仕組んだ。そうすることで、自分たちでルールを作ったり、友と協力しながら様々な運動ができたりするなどの『運動の楽しさを感じる』こと、めあてをもち、時間いっぱい運動し、やりたいことをやりたいだけ『意欲的に学ぶ』こと、遊びの中から動きを取り上げ、「どんなことができそう？」と問いかけながら『子どもと共に作る』ことができた。

(2) 『『泳げる』とは？水泳学習の小中連携について考える』 常盤中学校 小山 吉明先生

中学1年生の実態として水泳を苦手とする生徒が多い。ドル平泳法を教材として取り入れると、4～5時間程度で25m泳げるようになった。これまでは、バタ足などで進むことを優先した指導であったために、苦しくなり泳ぐのが苦手になったと考える。呼吸・息継ぎ（水中では息をせず、顔を上げると同時に吐いて吸う）と浮くこと（沈むこと）を学習内容とすることで、中学生になってからでも長く泳ぐ力がついた。

2 助言者のご指導やおまとめ

(1) 子どもは、心が動いて、体が動く。大人が頑張れば頑張るほど、子どもは苦しくなって逃げる。

自分の考えで自由に動ける時間が昔に比べて格段に減っている。授業中の離席が増えているのも、ずっとがまんしているから。水道が自動化して、蛇口をひねるなどの微細運動が生活の中から減り、体を操ることが苦手な子どもも増えている。子どもが子どもらしくいられる場所をつくることが大切。

(2) レポートにかかわって

① 自発的な活動、心の動きを大事にした取り組みである。運動は好きにさせるのではなく嫌いにさせなければよい。選択できる場づくりがなされていると、自分で運動を選んで取り組むことができ、心も動き、体も動くことにつながる。また、体育では、安全に行うことや社会性の高まりも意識していきたい。

② 水泳は難しい授業だと思われている。コツをしっかりと使わせることが大切。息を吐くことは体が沈むことにつながるが、息は吐かないと吸えない。競泳選手は水中で吐いているが沈まないように訓練されている。上手に体を浮かせるためには吐かないという指導はよい。水泳の目的は水の中でいかに自分の命を守るかということ。学習指導要領でも泳法を学ぶのは高学年からであるので、低・中学年では、浮くことをしっかりと身につけてほしい。東御市は水泳を指導する講師のためのプールをつくっている。

三 残された課題

- ・外遊びは20年前から減っているために、子どもの運動量も減っている。
- ・多様な動きを身につけていない子どもに週3時間の体育で質の高い授業を要求されている。

第8分科会 教育条件の整備

一 研究テーマ

子どもたちが、安心して充実した学校生活を送るための教育条件整備はどうあったらよいか。

二 研究成果

1 レポート発表

(1) 「卒業アルバム代の旅行貯金化の経緯と学校徴集金の増額について」

井上小学校 植田 信一さん

卒業アルバム予算を旅行貯金からの支出に変更し、不足金の徴収方法を一括から積立へ変更することにより保護者負担の軽減を行った。その実践の経緯を紹介。

(2) 「学校集金の見直しについて」

日滝小学校 轟 純子さん

公費負担を増やし、学校集金を減額することにより保護者負担の軽減を行った。その取り組みの内容や経緯を紹介。

(3) 『子どもの貧困』を考える」

上高井支部事務職員部常任委員会 小林 美恵さん

学校事務職員の視点から「子どもの貧困」の現状と課題・就学援助事務を通してみえる上高井地域の実態・学校集金保護者負担軽減の取り組みを紹介し、学校や個人でこれからできることについて問題提起を行った。

2 意見交換

(1) レポート発表後の質疑応答

「学校集金を減らすために事務職員が行っている工夫」「鍵盤ハーモニカや運動着のリユース」「医療費の無料化」等。

(2) グループ討議

レポート発表をうけ、「子どもの貧困」について保護者・教職員・事務職員それぞれの立場で感じたことや学んだこと、今後の改善が求められることについてグループ討議を行った。

(3) 全体での意見交換

○レポートの中にあつた、それぞれの学年で必要な物品の購入予定時期とおよその金額の表を出してもらえると家庭内でお金の支出の見通しを持つことができる。(保護者から)

○就学援助の「援助」、「支援」という言葉に抵抗がある保護者もいると感じた。改善の余地がある。(事務職員から)

○学校で十分な学習が受けられないことが塾に通わせることにつながり、保護者の負担を増やすことになってしまう。教師にできるのは、子どもに確かな学力をつけること、中学校や高校へ進路を導くことである。(教職員から)

3 助言者の指導

須坂市教育委員会学校教育課長 関 政雄さん

(1) 就学援助の認定基準は、自治体によってまちまちである。また、どこまでお金を出すかも市町村の考え方によって異なる。予算は厳しいが、子どもが等しく教育を受ける権利を守ることができるようこれからも努力していきたい。

(2) 今後の課題として、家庭の教育力があげられる。金銭的な援助だけでなく、家庭内の困難な状況にも介入し、援助していくことが必要である。

三 残された課題

保護者がレポート発表を聞いた際、公費や私費、学年費や旅行貯金といったそれぞれの予算の用途や執行状況が分かりにくかった。予算の項目に触れる前に、学校予算の全体像が分かる資料を提示する必要があったと思う。来年度以降は全ての参加者にとって分かりやすい資料の用意を心がけたい。

第9分科会 情報教育

一 研究テーマ

教育現場における ICT 機器の活用と情報モラル教育

二 研究成果

1 レポート発表

「書画カメラ・電子黒板を用いた学習指導」（旭ヶ丘小学校 三浦、林、清水各先生）

（1）普通教室内プロジェクターと書画カメラの配置について

- ・平成28年度市内全小中学校の普通教室にプロジェクターとプロジェクター用インターフェースボックス、スクリーンを配置。書画カメラを10台追加配備。

（2）実際の授業場面から

- ・電子黒板などと合わせて使用することで、子ども達により興味・関心を持たせることができる。
- ・教材プリント、子どものノートなどそのまま投影し、学習の進度に合わせた授業進行ができる。
- ・フリーズ、拡大縮小、オートフォーカス機能など、授業に有効に活用できる。
- ・デジカメで撮影した画像をUSB接続してすぐに投影できる。（スライドショー機能あり）
- ・TVがいらず、地デジ外付けチューナーがあれば、スクリーン大画面で見ることができる。
- ・言葉だけではなく、スクリーンに提示することで正確に指示が伝えられる。（視覚的支援）

（実践事例：1年生へのひらがな指導でプリントを拡大し提示、タッチペンと併用しはねや止めの指導。図工で刃物などの使用方法を手元で映して提示。家庭科などの調理実習方法を提示。）

（3）出席者の感想

- ・文化祭の合唱練習で有効に活用できた。
- ・日常的に使用しているが、パワーポイントを使用するときには、教室用パソコンがあるとさらに良い。（PDFにすると取り込み可）
- ・学級懇談会で子ども達の活動の様子を見せていただくとありがたい。

2 教育の実践「郡内小中学校の情報モラル教育」～各校の情報モラル教育の計画と実態を紹介～

- ・年度当初保護者にプリントを配布、保護者懇談会で扱い情報モラルについて注意喚起をしている。
- ・児童に情報モラルの授業実践。（インターネット上のトラブルや情報漏洩等の危険性など）
- ・外部講師を招き、情報モラル教育の実践。（情報の信頼性、SNS利用の危険性についてなど）
- ・職員研修でネットやSNS利用でのトラブル、情報モラル教育について扱い職員の共有化を図る。
- ・インターネット、ゲームなど児童生徒の使用時間を短縮する取り組み。

3 助言者の指導

「教育現場における ICT 機器活用と情報モラル教育」 須坂市技術情報センター所長 小林 晃 先生

- ・主体的に考え、他者と協働しながら新たな価値を生み、問題の発見・解決する能力を身に着ける教育として、2020年代に教育の情報化を目指し、高校での教科化や小・中・高でのプログラミング教育が取り入れられる。教育現場での環境整備や職員のスキルアップが必要である。
- ・ITスキルの重要性を感じている保護者の数が多いにもかかわらず、学校現場での活用数が少ないのが実態である。今後の時代に合った子ども達の資質・能力の向上を考えた教育が必要である。

三 残された課題

- ・情報モラル教育を保護者と共にどのように進めていくか。（フィルタリングの有効活用も含めて）
- ・情報機器を授業で有効に使うためのカリキュラム作成や、実践の積み重ねと教師間の共有化。
- ・環境整備や職員のスキルアップを通じて学校現場でのIT活用をさらに進めていく必要がある。

第 10 分科会 国際理解・コミュニケーション活動

一 研究テーマ

英語を使ったコミュニケーション活動と国際理解教育

二 研究成果

- 1 レポート発表 「学級担任が進める小学校外国語活動の実践」 小山小学校 中島 弘樹先生
学習カードや情報機器などの使い方、外国語教材ソフト「Hi, friends!」の利用方法、外国語授業案の一般化を考察することにより、外国語活動の1つの授業形態を提唱する。

(1) 教具

- ・人間関係作りの遊びを取り入れた学習カード →ビンゴカード、会話練習用ワークシート
- ・Power Point と「Hi, friends」の併用 →P.Pで既習事項の確認や、練習する会話文の表示をする。
「Hi, friends」付属のソフトの活用。
- ・電子オルガン →チャンツで何かを練習したい場合に、電子オルガンのビートを刻む機能を利用する。

(2) 授業展開

- ・LESSON ごと 「親しむ・慣れる」→「語彙を増やす」→「新しい場面について」→「練習」→「実践」
- ・いくつかの LESSON の振り返り 「親しむ・慣れる」→「語彙を増やす」→「復習」→「練習」→「実践」

(3) 教師の関わり

- ・授業中に用いる言葉・・・基本は日本語でもよいのではないかと。ただし、活動の開始・終了時や、頻繁に使用する決まり文句などは英語で覚えてしまい、毎回使用する。
- ・調子・・・英語の授業を行う際は、表情や身振り手振りに注意し、元気よく明るく話すことが大切。
- ・教科としての指導・・・小学校の英語が対話的体験的であるのに対し、中学校の英語が語学的で受験対策的であるという現状。これからの英語の授業は、そのどちらに偏ることもなく、両者を大切にしたいものにしてはいけない。

[質疑応答、感想、今後の課題]

- 「読む力」「書く力」の保証・・・「聞く」「話す」活動だと差はあまりでないが、「読む」「書く」だと学習差が生じる。この点をどうしていくべきか。
- チャンツをあきずにやる方法。
- 外国の人と話をして言葉がかえってきたときの喜びをどう味合わせるか。
- 日本人が新しい語学を学ぶためには、日本人らしい学び方がある。そこを模索すべき。
- コミュニケーションにとってはユーモアが一番大事なのかな、と感じた。

- 2 「日本の小学校での外国語活動の実践について」 ALT ジェームズ・ウィリアム先生

(1) ジェームズ先生による授業実践 “What are you doing?” “I’ m ~ ” の定着まで。

- ・ワークシートを使って、友だちと “What are you doing?” “I’ m ~ ” で対話する活動。
- ・英語のイントネーションに着目した発音練習。
- ・動詞+ing 形についてリピート練習、ジェスチャーをつけての発音練習。／ “I’ m ~ ” を書く活動。

3 助言者の指導

- ・繰り返しやらせるのではなく、やりたくなる活動で慣れ親しむことが大切。
- ・教材教具を上手に使えるかどうか授業が上手いくコツになってくる。教具はとても重要。
- ・自分の関わりのある情報を介して子どもがやりとりする→人間関係の構築に繋がるような教材の必要性
- ・すべてわからなきゃいけないのが小学校英語ではなくて、わかる言葉やジェスチャーでつないで「推測」する、ということが大切である。体験的に理解する力をつけていきたい。
- ・学級担任は英語のモデルになるのではなく、「英語を使う人」のモデルになろう。Try to use English!

第11分科会 特別支援教育

一 研究テーマ

学校・家庭・地域で連携して進める特別支援教育

二 研究成果

1 レポート発表の概要

(1) 「学校のユニバーサルデザイン化」

井上小学校 松澤 裕子先生

文部科学省の調査における、通常の学級で特別な教育的支援が必要な児童・生徒の割合が6.5%という結果が出ている今、それぞれの児童・生徒に合った学び（インクルーシブ教育）が必要である。そこで井上小学校では、どの子も楽しく学び合って、「わかる」「できる」ユニバーサルデザイン化を通して、学習しやすい学校、教室づくりをしていくことを大切に取り組んできた。その取り組みとして、「授業のUD化」「ひと環境のUD化」「もの環境のUD化」を主に行っている。また、「井上BASIC」という学校生活や授業の基本をまとめたものを作成し、教室や教員が変わっても同じルールの中で子どもたちが学習できるようにしている。UD化を通して、子どもの目線で見、目の前の子どもを分かろうとする意識が大切であると再認識した。

(2) 「特別支援学級で学ぶ生徒の進路指導について 現状と課題」

東中学校 栗林 収一先生

常盤中学校 久保田 英子先生

墨坂中学校 飯泉 幸子先生

特別支援学級での進路指導における重要な観点は、①「自己理解」②「早めの進路指導」である。①は、他人ができることが自分のできることとは限らないので、生徒自身が、自分の得意や苦手を知ることで、自分を活かせる進路を選択できる。②は、自分で進路を決めていくという実感をもたせるためにも必要である。1、2年生のうちから進路相談や、学校見学などを多く行うことが大切である。しかし、学習支援の困難さや、保護者と本人の思いの違いなど、課題も多々ある。

2 学んだこと

- (1) ・UD化を進めることで、学校内の基本が定着し、教員が変わっても、指導は変わることなくでき、児童・生徒も安心して学校生活を送れるようになる。
・UD化を進める上でも、教員間の連携は不可欠である。
- (2) ・早めに進路指導を行い、保護者との連絡を密に取っていくことが大切である。
・保護者にも、その子の特性を十分理解してもらい、進路を決めていくことが大事である。

3 助言者の指導

- ・高校でもUD化が進んできており、現在3割の学校で実施されている。
- ・生徒と教員の「対話的な関係性」が大事である。まずは、生徒と話をし、その生徒を理解しようとする事。
- ・「困った生徒」ではなく「困っている生徒」という見方にシフトチェンジして考えることが大切。

三 残された課題

- ・地域や社会的に特別な支援が必要な子どもたちへの理解が浅く、今後子どもたちが社会に出ていくときに心配。UD化のような活動を通して周りへの理解を広げていけたらいい。
- ・高校で通級指導は行っているが、そこですべての支援を行う状況にあるので、通常学級の中でも支援のあり方を考えていくべきである。

第12分科会 表現力・感性、思考力の育成

一 研究テーマ

子どもたちの豊かな表現力や感性を育てるための指導・支援のあり方

二 研究成果

1 レポート発表

(1)「思考を働かせやすい環境設定とは ～幼稚園児との交流から～」

栗ガ丘小学校 久保田 智絵美先生

2年生の児童が幼稚園児と交流をする中で、子ども自身が見つけた課題から、意欲的に解決の方法を考えていった実践を報告して頂いた。

児童自身の生活や必要感に則した課題を設けたり、思考の流れが繋がるような環境を整えたりすることで、思考力を十分に発揮することができた。

(2)「音楽について生徒が思うことを生徒なりの言葉にすること」

相森中学校 新井 美季先生

1年生と2年生の音楽の授業の実践を報告して頂いた。

生徒が音楽の中で自分の感じたことを言葉や図に表すことで、感じたことの根拠を見つけることができ、自分自身の思いをもって音楽の表現に繋げることができた。

2 学んだこと（実技講習・リトミック）

リトミック研究センター長野第一支局チーフ 北島由美先生

北島先生のご指導で参会者全員が関わり、様々なリトミックの活動を体験した。

音楽やリズムに合わせて体を動かしたり、仲間とかかわり合ったりする中で、音楽の様々な要素を感じたり、音楽の楽しさを味わったりすることができた。

3 助言者の指導

北部児童センター所長 望月 千恵子先生

「表現力・感性・思考力」は特別なものではなく、日常の中にあるものである。私たちはそれらを総合しながら日々を送っている。幼少期から日常生活や人と人との関わりを大切にし、向き合っていくことで情緒が育っていく。学校や家庭において、子ども達と共にウキウキしながら学んでほしい。フェイス・トゥ・フェイスで子ども達と向き合い、考えること、感じることを大切にしたい。

第13分科会 子どもと本

一 研究テーマ

子どもが読書に親しみながら、心豊かな生活を送れるようになるための、学校・家庭・地域の支援のあり方

二 研究成果

オープニング：読み聞かせ等の実践（「たんぼぼの会」のみなさん）

- ・詩『あいたくて』（工藤 直子）
- ・『うし』（内田麟太郎 作 高島 純 絵）
- ・『大きなかめ』（「100人のおとうさん」）昔話
- ・『パパのしごとはわるものです』（板橋雅弘 作 吉田尚令 絵）
- ・『ねえ 知ってる？』（かさいしんぺい 作 いせひでこ 絵）

1 レポート発表

- (1) 「図書館を活用した子どもがわくわくする探求活動とは」 井上小学校 小林 裕美先生
自分の追究したい課題に照らして図書館を利用する体験を充実させていくために、国語の説明文「くちばし」や「じどうしゃくらべ」において、クイズづくりやかるたづくりを単元計画に位置付けた。[みるみるめがね]や[文型カード]を利用しながら、夢中になって絵本を読んだり、進んで図鑑を手取る姿が見られた。
- (2) 『言語活動の充実』をはかるための図書館教育のあり方

～国語科と技術科との教科横断的カリキュラムを通して～ 墨坂中学校（高甫小学校 武田 利江先生）
図書館を全教科で日常的・実質的に活用していくために、教科横断的に単元構想を考えて実践をした。国語科の授業で「本の帯作り」をした際に練り上げた文章をCMのキャッチコピーとして使い、技術科で学んだプレゼンテーション技能から、相手・目的に応じて、効果的な技能を選び、お薦めの本のCM（プレゼン）を作り上げた。国語科での「図書館を利用し、相手意識・目的意識を明確にした言語活動」が技術科の学習と連携することによって、生徒にとってより必要感のある活動となり実生活に生きるものとなった。

- (3) 「貸し出し冊数アップ↑を目指した小さな工夫」 日滝小学校 岡本 照枝
貸し出し冊数を何とかして増やしたいとの願いから、児童会を中心とした子どもたちを動かす取り組み、そして先生方へのアプローチを考えてみた。児童会の時数が減り1学期の読書週間がなくなったが、図書委員のやる気とアイデアをいかし、「ポイントカード」のイベントを行ったことや、職員用の図書館だよりの発行、また、日報に図書館情報を載せてもらうなどにより、冊数の増加につながってきている。

2 学んだこと...助言者の越高一夫先生によるご指導

すべての学力は国語力からと言われるように、図書館教育、読書や言葉に関する教育は、とても大事であるが、他に次々と求められるものがあり、なかなか深まらない現状がある。しかし、だからこそ、信念をもって図書館教育、本を読む力を育てることを大事に考えたい。

そのためにも、保護者のみなさんも先生方も、ご自分の生の声で読み聞かせることが、子どもが自ら読む力となるので、実践してほしい。何を読むか迷ったら、昔話がよい。短編の中に起承転結があり、生きるための知恵が詰まっていて、読書の世界が広がるというよさがある。

3 グループ別の話し合い（お薦めの本の紹介などを4グループに分かれて行った。）

4 助言者の指導 越高一夫先生によるブックトーク

- 「ひとりになったライオン」（夏目義一 文・絵）・・・読み聞かせでは絵ちからのあるものなど吟味。
「このあいだになにがあった？」（佐藤雅彦 著）・・・新たな知識を得られる楽しさも読み聞かせで。
「詩ってなあに？」（ミーシャ・アーチャ 作）・・・体験を言葉にしていくことで感性が育まれる。
「河童のユウタの冒険」（斎藤惇夫 作）・・・ファンタジーの世界を楽しめることが生きる力にもなっていく。
「もう一つのワンダー」（R. Jパラシオ 作）・・・障がいをもつ友達に接することから自分を見つめる。
「ぼくらがつくった学校」（ささき あり 文）・・・図書館教育の役割は、自学能力をつけることにより生きる力をつけていくこと。その実践が書かれている。

三 残された課題

子どもたちの読書の世界を広げていくために、子どもと本を結ぶのが親、教師の役割である。子どもに手渡す前にその内容、よさを紹介しながら与えられるようにしたい。自身の読書生活・情報の充実も課題となる。

あ と が き

本年度もたくさんの皆様の参加をいただき、上高井教育研究集会を盛大に開催することができました。上高井教育研究集会は他郡市にはみられない開催方式でおこなわれ、児童生徒に関わるPTA・幼稚園・保育園・育成会・公民館等から毎年多くの皆様に参加していただいています。地域の教育を皆で考え育んでいくために、本年度もテーマ別分科会に関係者が集い、抱える課題の解決に向けて真剣に討議することができました。本研究集会の素晴らしさを改めて認識すると同時に、支えてくださる方々の熱意と真摯な取り組みに触れることができました。

第64回上高井教育研究集会は、熱のこもった貴重なレポートを基にした協議の他に、実技を交えた講習を位置付けたりしている分科会など、非常に工夫されていました。どの分科会場でも、学校・家庭・地域が一体となって教育問題に取り組んでいこうという力強さと熱意を感じました。そして、助言者の先生方からは、解決に向けた具体的な助言や提言をいただきました。

このように実り多き教育研究集会となったのは、分科会の運営に当たられた分科会長の皆さんはじめ分科会役員の方や自校の参加者やレポートの募集・取りまとめをいただいた学校代表者の皆さんなど、多くの方々のご尽力の賜物であるとともに、会場をご提供くださいました相森中学校の校長先生はじめ先生方、生徒の皆さんのおかげであると、心より感謝申し上げます。

最後に、本研究集会推進に関わられた三団体の代表者の皆さんの日程を記し、次年度へ繋げます。

- 4月24日 第1回三団体代表者会・基本方針の確認、推進方法の確認等
第1回推進委員会 ・係分担・推進日程の確認、分科会希望調査の検討等
- 5月 2日 第2回推進委員会 ・分科会設定に関する検討、提出レポート調査検討、他団体要請等
- 5月 8日 第1回学校代表者会・基本方針・推進日程の確認、提出レポート調査等依頼等
- 5月22日 第3回推進委員会 ・参加者確認、分科会長選定・依頼、分科会助言者の選定等
- 6月13日 第4回推進委員会 ・分科会長会の持ち方、レポート形式、他団体への参加依頼、来賓確認、中間連絡会の持ち方等
- 6月20日 分科会長・司会者打合せ・日程確認、討議議題確認、研究計画の立案、分科会運営計画作成等
- 7月10日 中間連絡会 ・分科会討議計画、記録について、分科会要望書作成等
第5回推進委員会 ・参加者名簿の作成集計、要項作成、当日日程の検討等
- 7月18日 第6回推進委員会 ・集会要項校正、会場確認、係分担、今後の日程の確認、教研日より
- 8月22日 学校代表者会 ・レポート交換、集会要項配布
第7回推進委員会 ・日程の打ち合わせ・前日準備計画確認、準備計画・行動細案確認等
- 9月 1日 分科会長会 ・会場のチェック、反省まとめの依頼、当日の動きの確認
第8回推進委員会 ・前日準備、最終確認
- 9月 2日 教研集会当日
- 10月 3日 第9回推進委員会 ・概要の編集、反省の集約、代表者会について
- 11月20日 第2回三団体代表者会・三団体への答申、会計中間報告、反省総括等
- 2月16日 第10回推進委員会・会計監査、反省

平成29年9月吉日

第64回上高井教育研究集会推進委員長 澁谷 茂夫